

同性愛者に対する態度についての一研究

—男女差，メディア接触量を中心として—

山下 玲子
源氏田 憲一

1. はじめに

今日、エイズの全世界的な蔓延という事態を受けて、日本においても同性愛に対する関心が高まってきている。また、そのような関心の高まりとともに、同性愛者が置かれている状況及び立場が社会問題化している。しかし、同性愛者がいかに差別されているかについては、マスコミなどでしばしばとりあげられるが、同性愛者の実態や、一般の人々が実際に同性愛や同性愛者をどのように見ているかについては、日本においてはほとんど知られていないように思われる。他方、同性愛の存在が早くから注目されていた欧米では、同性愛及び同性愛者についての学術的研究が、1960年代からある程度行われてきている。初期の研究では、同性愛は病的なものとして扱われており、研究の目的は主にその治療に役立てることであった(例えば、Charles & Socrides, 1968)。1970年代の後半になると、同性愛は病気ではなく、一種の信念体系であるという観点としてとらえられるようになり(Morin & Garfinkle, 1978)、同性愛や同性愛者に対する態度についての研究が、臨床心理学ではなく社会心理学のテーマとして取り扱われるようになった。

近年は、同性愛及び同性愛者に対する態度の違いを、性差(Kite, 1984)、ある特定のパーソナリティ特性の違い(Haddock, Zanna, & Esses, 1993)により説明しようという試みもなされている。さらに、同性愛者そのものや同性愛的行動のみならず、同性愛者の市民権に対する態度についての研究(Clark, & Mass, 1988)も行われている。

欧米における同性愛者に対する態度についての研究は、たいていの場合、"homosexual"という単語によって想像される対象についての態度を測定しており、態度対象の性別を特定していない。しかし、これらの研究における事後調査により、一般に、"homosexual=男性の同性愛者"というイメージが持たれていることが示されている。また、調査対象者も圧倒的に男性が多い。女性の

同性愛者に対するイメージは、男性の同性愛者に対するイメージほど明確なものではなく、男性の同性愛者に対するイメージがそのまま当てはめられていたり、男女のカップルにおける男性の役割イメージが当てはめられていたりしている場合が多い(Kite,1984)。また、男性、女性の同性愛者に対して個々にイメージを測定している研究は大変少数であることも示されている。

そこで、今回の試みでは、同性愛者に対する態度尺度を構成し、それをを用いて男性、女性それぞれの同性愛者に対して個々に態度を測定することにした。また、調査対象者も男性、女性両方とした。それにより、男性、女性の同性愛者に対して、男性、女性がそれぞれどのような態度を抱いているのかを明らかにすることを試みた。また、米国における研究では、男性の同性愛者は女性の同性愛者に比べ、ネガティブな態度を抱かれやすく、その傾向は女性よりも男性に顕著であるという結果が得られているが(Kite,1984)、米国に比べ、現実社会において同性愛者に対してあまり馴染みのない日本人においても、同様の結果が得られるかどうかとも検討した。さらに、日本においては、同性愛者のイメージは、現実社会におけるよりも、マスコミの報道やメディアなどの影響が先行しているものと予想される。従って、メディア接触量が同性愛者に対する態度に何らかの影響を及ぼしている可能性についても合わせて検討した。

2. 目的

この調査の目的は、次の2点である。

(a)社会的態度を測定する方法のうち、Likert(1932)の評定加算法による尺度化の手続きに従い、同性愛者に対する態度尺度を構成する。

(b)(a)で構成された尺度を用いて、同性愛者に対する態度の実態及び同性愛者に対する態度がどのように形成されるのかについての以下の仮説を検証する。

仮説1) 男性の方が女性に比べ、同性愛者に対して非好意的である。

仮説2) 男女とも、女性の同性愛者に対しての方が男性の同性愛者に対してよりも好意的である。

仮説3) 同性愛を扱ったメディア(印刷・映像とも)に接触した回数が多いほど、同性愛者に対して好意的である。

仮説4) 社会問題に関心がある者の方が同性愛者に対して好意的である。

3. 方法

- 被験者：一橋大学で心理学の講義を受講している1, 2年生74名(男61, 女12, 不明1)。
- 日時及び場所：1994年6月30日 4限 一橋大学小平分校2101教室。
- 調査用紙：同性愛者に対する好意度を測定するための26項目を予備尺度として用意した(うち, 好意的なもの13, 非好意的なもの13; 付録参照)。尺度の作成の際, 感情的な基準の項目と社会的な基準の項目のバランスに留意した。ネガティブな項目は生理的嫌悪感を中心(ポジティブ2, ネガティブ7), ポジティブな項目はメディアで描かれるイメージを中心(ポジティブ7, ネガティブ1)に構成した。また, 社会的・道徳的カテゴリーをネガティブ, ポジティブほぼ半分づつ(ポジティブ4, ネガティブ5)で構成した。回答カテゴリは, 「賛成」, 「どちらかといえば賛成」「どちらともいえない」, 「どちらかといえば反対」, 「反対」の5段階に設定した。また, 男女の同性愛者に対する態度を測定するため, 全項目において, 女性の同性愛者(以下Lと略記)と男性の同性愛者(以下Gと略記)の両方について回答してもらうことにした。その結果, 調査用紙は, LとGという2つの態度対象に対する好意度を測定するものとなった。フェイスシートは, 性別, 所属学部, 年齢, メディアの接触量などを調べるものとした(調査表は, 付録参照)。
- 手続き：「心理学」の講義時間中に, 同様の調査を行う他の3グループの学生とともに調査用紙による集合調査を実施した。

4. 結果

(a) 尺度の信頼性について

各被験者の全項目の(簡便法による)尺度値の和を求め, 仮態度得点とし, その得点の上位25%群(以下上位群)と下位25%群(以下下位群)との間で, 各項目の得点の平均の差の検定を行なったところ(上位-下位分析), 以下の3項目において, 有意水準5%で有意差が見られなかった。

問3「同性愛者は性格がおだやかだ(Lにおいて)」

問9「同性愛者は嫉妬深い(L, G両方において)」

問23「同性愛者は人生を楽しんでいる(Gにおいて)」

予備尺度と、これら3項目を除外した最終尺度のそれぞれについて、クロンバックの α 係数を求めた結果、以下のようになった。

L予備尺度：0.8908 L最終尺度：0.8920
G予備尺度：0.9138 G最終尺度：0.9190 (数字は α 係数)

従って、予備尺度及び最終尺度は、L、Gにおいて両方とも十分に信頼性の高いものであるといえる。

(b) 仮説の検証

以下の仮説の検証においては、上記の最終尺度を用いた。最終尺度は、項目数23であり、この尺度における態度得点の平均は、Lに対しては68.808、Gに対しては74.808、被験者における最高点はLにおいては103.000、Gにおいては113.000、最低点はLにおいては27.000、Gにおいては27.000であった(この尺度での最高115.000、最低23.000)。なお、数値が小さいほど、同性愛者に対して好意的であることを示している。

(1) 仮説1及び2について

男女間で、態度得点の平均の差の検定を行なったところ、Gについては、女性($\bar{x}=64.66, n=12$)の方が男性($\bar{x}=76.80, n=61$)よりもGに対して好意的であるということが示された($t=2.24, df=71, p<.05$)。Lについては、統計的に有意な差は見られなかったが、得点のみを見た場合、女性の方がLに対して好意的であることが示された(男： $\bar{x}=69.95, n=61$; 女： $\bar{x}=63.00, n=12$)。男性、女性それぞれの、L、Gそれぞれに対する態度得点の平均の差の検定を行なったところ、男性ではLに対して有意に好意的であることが示された($t=5.88, df=60, p<.001$)。女性においては、統計的に有意な差は見られなかったが、Gに対してよりもLに対して好意的であった($t<1, ns$)。さらに、被験者全員のGに対しての態度得点とLに対しての態度得点の平均の差の検定を行なったところ、Lに対しての方が有意に好意的であることが示された(L: $\bar{x}=68.81$; G: $\bar{x}=74.81, t=5.57, df=72, p<.001$)。

(2) 仮説3及び4について

同性愛を扱ったメディア及びドキュメンタリー番組の視聴頻度の違いにより、同性愛者に対する態度が異なるか否かについて検討を行った。まず、同性愛を扱った映像メディア（以下映像メディアと略記）を4回以上見たことがある者と、見た回数が3回以下の者との間で、態度得点の平均の差の検定を行なったところ、L、Gについてともに、接触回数が多い者の方が有意に好意的であるということが示された(L: $t=2.30, df=71, p<.05$; G: $t=2.32, df=71, p<.05$; 表1参照)。また、映像メディアを4回以上見たことがある者と、1回も見たことがない者との間で、態度得点の平均の差の検定を行なったが、Gについてのみ接触回数が多い者の方が有意に好意的であるということが示された(G: $t=2.08, df=31, p<.05$; 表1参照)。Lについては、4回以上見たことがある者の方が、好意的であるという傾向が見られた(L: $t=2.02, df=31, p<.10$; 表1参照)。さらに、映像メディアを1回から3回見たことがある者と、4回以上見たことがある者との間でも、態度得点の平均の差の検定を行ったが、ここでは、L、Gについてともに、接触回数が多い者の方が、有意に好意的であるということが示された(L: $t=2.20, df=45, p<.05$; G: $t=2.22, df=45, p<.05$; 表1参照)。なお、映像メディアを1回も見たことがない者と、1回から3回見たことがある者との間の態度得点の平均の差は、L、Gともに見られなかった(L: $t<1, ns$; G: $t<1, ns$; 表1参照)。

同性愛を扱った印刷メディア（以下印刷メディアと略記）を4回以上見たことがある者と、見た回数が3回以下の者との間で、態度得点の平均の差の検定を行なったが、L、Gについてともに、有意差は見られなかった(L: $t=1.76, ns$; G: $t=1.25, ns$; 表1参照)。また、印刷メディアを4回以上見たことがある者と、1回も見たことがない者との間で、態度得点の平均の差の検定を行なったが、Lについてのみ、4回以上見たことのある者の方が、好意的であるという傾向が見られた(L: $t=1.86, p<.10$; 表1参照)。Gについては、統計的に有意な差は見られなかった(G: $t=1.49, ns$; 表1参照)。印刷メディアを1回も見たことがない者と、1回から3回見たことがある者との間の態度得点の平均の差は、L、Gともに見られなかった(L: $t<1, ns$; G: $t<1, ns$; 表1参照)。印刷メディアを1回から3回見たことがある者と4回以上見たことがある者との間の態度得点の平均の差も、L、Gともに見られなかった(L: $t=1.57, ns$; G: $t<1, ns$; 表

1 参照)。

表1. メディアへの接触頻度の違いによる態度得点の平均

	人数	ATL平均	ATG平均
AV 4回以上	7	57.14	60.57
AV 3回以下	66	70.04	76.32
AV 0回	26	70.50	77.08
PR 4回以上	8	60.38	67.50
PR 3回以下	65	69.85	75.71
PR 0回	30	71.47	77.70
ドキュメンタリー有	53	67.45	74.26
ドキュメンタリー無	20	72.40	76.25

ATL: Lに対する態度得点 ATL: Gに対する態度得点 (以下の表全て共通)

AV: 同性愛を扱った映像メディア PR: 同性愛を扱った印刷メディア

さらに、同性愛を扱ったドキュメンタリーを見たことのある者とない者との間で、態度得点の平均の差の検定を行なったが、L(見たこと有: $\bar{x}=67.45, n=53$; 見たこと無: $\bar{x}=72.40, n=20$), G(見たこと有: $\bar{x}=74.26, n=53$; 見たこと無: $\bar{x}=76.25, n=20$)についてともに、統計的に有意な差は見られなかった(L: $t=1.30, ns$; G: $t<1, ns$; 表1参照)。

次に、社会問題に対する関心の差により、同性愛者に対する態度が異なるか否かを検討した。今回の調査では、社会問題に対して関心のある者として、新聞をよく読む者、好きなテレビ番組のジャンルにニュースまたはドキュメンタリーを挙げている者を想定した。

新聞を読む時間が1日あたり40分以上の者と9分以下の者との間で、態度得点の平均の差の検定を行なったが、L, Gについてともに、統計的に有意な差は見られなかった(L: $t<1, df=18, ns$; G: $t<1, df=18, ns$; 表2参照)。また、好きなテレビ番組のジャンルにニュースまたはドキュメンタリーを挙げている者と挙げていなかった者との間で、態度得点の平均の差の検定を行なったが、L, Gについてともに、統計的に有意な差は見られなかった(L: $t=1.03, df=66, ns$; G: $t<1, df=66, ns$; 表2参照)。

表2. 新聞を読む時間および好きなテレビのジャンルの違いによる態度得点の平均

	人数	ATL平均	ATG平均
新聞・40分以上	4	71.00	80.25
新聞・9分以下	16	65.31	69.06
N・D好き	38	67.74	74.55
N・D選択せず	30	71.47	76.40

N.D: ニュース及びドキュメンタリー

4. 考察

(a) 尺度の信頼性について

今回の調査により得られたデータを基に算出した α 係数の値から、今回構成した予備尺度、最終尺度ともに十分高い信頼性を持っていると考えられる。最終尺度構成の際、除外された項目は3項目であった。そのうち、問3「同性愛者は性格がおだやかである」はLのみ、問23「同性愛者は人生を楽しんでいる」はGのみで、上位-下位分析において有意水準5%で有意な差が見られなかった。問9「同性愛者は嫉妬深い」は、L、Gについてともに、有意水準5%で有意な差が見られなかった。

除外された項目のうち、問3（Lについて）は、回答が「どちらともいえない」に集中する傾向が見られた($n=36, 48.6\%$)。この傾向は、性格がおだやかであるということとLであるということとのイメージが結びつきにくかったからではないかと思われる。また、問9は、L、Gについてともに、「賛成」、「どちらかといえば賛成」という回答が非常に少なかった(2カテゴリ合算して、L: $n=7, 9.5\%$, G: $n=8, 10.9\%$)。この結果から同性愛者は、一般に嫉妬深いものであるというイメージが浸透しているのではないかと推測される。最後に、問23（Gについて）は、問9とは逆に、「反対」、「どちらかといえば反対」という回答が少なかった(2カテゴリ合算して、 $n=9, 12.2\%$)。我々は、この項目を好意的な項目として採用したが、「人生を楽しんでいる」という表現を被験者が、享乐的、退廃的といった否定的なニュアンスでとらえた可能性があり、その結果、「賛成」「どちらかといえば賛成」の回答が多くなったのではないか、と思われる(2カテゴリ合算して、 $n=37, 50.0\%$)。従って、今後、このような尺度を有効なものとしていくためには、特定の表現に対して人々が抱くイメージがポジティブであるかネガティブであるか、さらに細かく検討していく必要

性があると思われる。

ただし、今回の結果を解釈するにあたり、留意しなければならないことは、高い信頼性を持った一次元尺度を構成可能であるということが、尺度の信頼性というよりもむしろ、態度対象に対する態度が洗練されていないためかもしれないということである。日本ではまだ同性愛者が社会的に顕著な存在ではなく、同性愛者に対するイメージが精緻化されていないと思われる。従って、今後、日本における同性愛者の立場が変容し、欧米並みに社会的に顕著な存在になった場合、この尺度の信頼性は下がっていく可能性は十分あると思われる。

(b) 仮説の検証について

(1) 仮説1及び2－男女差について

同性愛者に対する態度の男女差は、我々の予測とほぼ一致する結果が得られた。我々の仮説の第1は、女性の方が男性よりも同性愛者に対して好意的である、というものであった。また、第2の仮説は、欧米と同様に、女性の同性愛者に対しての方が男性の同性愛者に対してよりも好意的である、いうものであった。

まず、男性においては、Gに対してよりもLに対して好意的である、という我々の仮説は実証された。女性の場合は、LとGとに対する態度に統計的に有意な差は見られなかった。さらに男女それぞれのL、Gに対する態度では、Gについては、女性の方が有意に好意的であることが示された。Lについても、有意差は見られなかったが、女性の方がやや好意的であることが示された。そして、全体で見ると、Gに対してよりもLに対しての方が好意的であることが示された。これらの結果から、男女どちらの同性愛者に対しても、女性の方が好意的であるといえるであろう。

この結果をさらに詳しく解釈するために、男女間の、各質問項目における得点の平均の差の検定も行なった。その結果、Lについては、問6「同性愛者が親戚にいてほしくない」、問11「同性愛者はモラルに反する」、問14「社会は同性愛者に冷たすぎる」、問18「同性愛者は低俗だ」の計4項目において、有意水準5%以下で女性の方が男性よりも好意的であることが示された。また、問5「同性愛者は病気の温床である」、問20「同性愛者は仕事ができない」の2項目において、有意水準10%以下で女性の方が男性よりも好意的である傾向が

見られた。Gについては、問10「同性愛者と一緒に仕事がしたい」、問25「同性愛者と友達になりたい」の2項目において、有意水準1%以下で女性の方が男性よりも好意的であることが示された。また、問6「同性愛者が親戚にいてほしくない」、問8「同性愛者は変態だ」、問11「同性愛者はモラルに反する」、問14「社会は同性愛者に冷たすぎる」、問21「同性愛者は純粋だ」の計5項目において有意水準5%以下で女性の方が男性よりも好意的であることが示された。さらに、問18「同性愛者は低俗だ」、問20「同性愛者は仕事ができない」の2項目において、有意水準10%以下で女性の方が男性よりも好意的であることが示された（表3参照）。

表3. 男女差が見られた項目の平均

	LQ5*	LQ6**	LQ11**	LQ14**	LQ18**	LQ20*
女性	2.17	3.50	2.25	1.58	1.92	1.50
男性	2.87	4.27	3.15	2.24	2.69	2.11

	GQ6**	GQ8**	GQ10***	GQ11**	GQ14**	GQ18**
女性	3.58	2.58	2.75	2.33	1.58	2.08
男性	4.47	3.48	4.06	3.26	2.15	2.90

	GQ20*	GQ21**	GQ25***
女性	1.50	1.67	2.50
男性	2.15	2.58	3.82

GQ : Gに対する設問 LQ : Lに対する設問

* : $p < .10$ ** : $p < .05$ *** : $p < .01$

これらの結果から、男性は女性に比べて、同性愛者を社会的に良くないものであるとみなしている傾向があるように思われる。欧米では、同性愛者そのものに対しては一般にネガティブな態度が示されているが、多くの人が同性愛者の市民権については認めるべきである、という意見を持っているということが示されており(Clark & Maass, 1988)、同性愛者を社会的に認めるべきではない、という結果は得られていない。従って、この傾向は、単なる男女差ではなく、他の要因、特に日本に独自の要因が影響している可能性が十分に考えられるため、今後詳しく検討していく必要があると思われる。

また、女性は、Gは純粋なものだが、Lはそうではないと考えているようであるが、この傾向は、男女差に加えて、多分にメディアによるイメージの影響

を強く受けていると思われる。そして、男性は、L、Gともに、低俗なものであるとみなしているようであるが、これもおそらくメディア、特にいわゆるアダルト・ビデオによるイメージが強く影響しているように思われる。さらに、女性は男性に比べて、Gと友達になりたいと考えているようであるが、これはGに対する物珍しさと、自分には危害は加わらないという安心感の反映ではないかと思われる。しかし、今後、日本においても、実体のないイメージとしてではなく、自分の身近にいる知り合いや友人という観点で同性愛者を見る機会が増加した場合には、このような結果は変化していく可能性があると思われる。

なお、今回の結果では、男性の、男性同性愛者に対する態度のみが、突出してネガティブであった。この傾向は、欧米の研究においても見られており、その説明要因として、主に、米国社会における男女の性役割の違い(Kite & Whitley, Jr., 1996)があげられている。今後の研究においては、なぜ男性だけがこのような態度を持つようになるのかについて、日本においても通用する説得力のある説明を用意する必要があるだろう。

(2) 仮説3及び4—メディアの接触量の差による態度の違いについて

我々の第2の関心事は、メディアへの接触量の違い、及び社会問題に対する関心の差により同性愛者に対する態度が異なるかどうかについてであった。今回の調査では、特にメディアの影響を中心に考慮したため、社会問題に関心がある者として、新聞を多く読む者、好きなテレビのジャンルがニュースまたはドキュメンタリーである者を想定した。しかし、新聞を多く読む者は新聞をあまり読まない者に比べ、統計的に有意な差ではないものの、仮説に反して、L、Gについてともに非好意的な態度を示していた。他方、好きなテレビのジャンルがニュースまたはドキュメンタリーの者は、そうでない者に比べ、L、Gについてともに好意的な態度を示していたが、統計的に有意な差は認められなかった。

これらの仮説の検証のために用いた新聞を読む時間については、回答を自由記述にしたところ、10分と30分に回答が集中し（10分：n=16, 21.6%；30分：n=25, 33.8%）、被験者を、正確に上位群・下位群に分類することができなかった。そこで、便宜的に9分と40分を臨界点として上位群・下位群を設定したが、上位群の人数が極端に少なくなってしまった(n=4, 5.5%)。そのため、

分析の結果に予想外の偏りが出てしまった可能性がある。好きなテレビ番組のジャンルについては、複数回答を認めたところ、多数の番組ジャンルを挙げる者が多くなり、その結果指標としてあいまいなものとなってしまったように思われる。

また、同性愛をテーマにした映像メディアに多く接触している者は、肯定的なメディア・イメージに接触することが多いと予想されるため、同性愛をテーマとした映像メディアに多く接触している者は、そうでない者に比べてL、Gについてともに有意に好意的な態度を示すのではないかと仮定した。この仮説は実証された。しかし、もう1つの指標として考えた印刷メディアの接触頻度の方は、印刷メディアに多く接触している者において、Lに対して好意的な態度を示す傾向が見られるのにとどまった。Gに対しては、有意な差は見られなかった。さらに同性愛を扱ったドキュメンタリーを見た経験による、L、Gに対する態度の差は見られなかった。

これらの結果から、映像メディアに多く接触している者が、L、Gに対して好意的であるといえる。そして、意図的に読まれると思われる印刷メディアに多く接触している者よりも、映像メディアに接触している者の方が、L、Gに対する態度が好意的であることから、映像メディアに数多く接触することにより、L、Gに対してより好意的な態度が形成されると推測することも可能である。しかし、同性愛や同性愛者を扱った番組があまり多くない現在の日本のテレビ番組事情から察するに、映像メディアに多く接触している者もまた印刷メディアに接触している者と同様に、意図的にそのようなメディアに接触していると考えられる。従って、ここでの結果は、映像メディアに数多く接触したことによりL、Gに対して好意的な態度を示すようになったのではなく、もともとL、Gに対して好意的な者が、映像メディアに数多く接触する傾向があると考える方が妥当であると思われる。

(c) まとめと今後の展望

今回の調査では、男女差に関しては、欧米の調査とほぼ同様の結果が得られた。しかし、同性愛者に対するネガティブ・イメージが、万国共通の単なる男女差によるものであるのか、それとも他の要因、特に社会的な要因が強く影響しているのかについては、今回の調査では、まだ明らかにすることはできなかつ

た。従って、今後、今回の調査で用いた尺度をさらに洗練したものとしていくとともに、日本における同性愛者に対するネガティブ・イメージの形成に寄与している要因をさらに明らかにしていきたいと思う。

また、同性愛者に対するイメージの形成に大きく寄与していると我々が想定した、メディアの影響についても、およそ仮説通りの結果が得られた。しかし、今回の調査のデータからは、特定のメディアへの接触量と同性愛者に対する態度の相関関係が明らかになったものの、その因果関係までは明らかにすることはできなかった。従って、今後、このような調査を実施する際には、同性愛者に対する態度に及ぼすメディアの影響を明らかにするような質問をもっと取り入れていく必要があると思われる。

最後に、今回の調査全般を通しての反省として、我々自身、態度対象である同性愛者に対して、あまり多くの知識を持ち合わせていなかったように思う。特に、調査を実施した我々の中にも無意識的に同性愛者に対するネガティブ・イメージが存在していたようである。従って、今回の調査では、同性愛者に対する好意度の測定というよりも、同性愛者の善悪の判断を行なわせるような尺度を構成していた可能性もある。今後、同性愛者に限らず、このような形で態度尺度を構成する機会には、態度対象に対する知識や理解を、より深めた上で行う必要があると思う。また、今回の調査では、被験者の同性愛者に対する知識を、メディアへの接触の多寡により推測したが、おそらく少数であると思うが、実際に同性愛者と何らかの接触を持っている被験者もいると思う。また、実際に被験者の中に同性愛者が含まれていた可能性もある。従って、今後の調査においては、被験者が同性愛者以外の人であるかどうか確認をとったうえで行うことが望ましいと思われる。また、同性愛者の知り合いがいるなど同性愛者との直接の接触が、同性愛者に対する好意度にどのように影響するかも検討してみるべきであろう。

参考文献

- Charls,W. & Socarides,M.D.(1968)The overt homosexual.
Grune & Stratton
Clark,R.D. & Maass,A.(1988)Social categorization in minority influence:
The case of homosexuality. European Journal of Social Psychology,18,

347-364.

浜 治世(1992)愛の心理学的研究—文学作品— 同志社大学文化学年報,41,12-55.

Kennamer, J.D. & Honnold, J.A. (1995) Attitude toward homosexuality and attention to news about AIDS. *Journalism Quarterly*, 72(2), 322-335.

Kernick, D.G. & Keefe, R.C. (1995) Age preference and mate choice among homosexuals and heterosexuals: A case for modular psychological mechanisms.

Journal of Personality and Social Psychology, 69(6), 1166-1172.

Kite, M.E. (1984) Sex differences in attitudes toward homosexuals: a meta-analytic review. *Journal of Homosexuality*, 10, 69-81.

Kite, M.E. & Whitley, B.E. Jr. (1996) Sex differences in attitudes toward homosexual persons, behaviors, and civil rights: A meta-analysis.

Personality and Social Psychology Bulletin, 22(4), 336-353.

Haddock, G., Zanna, M.P. & Esses, V.M. (1993) Assessing the structure of prejudicial attitudes: the case of attitudes toward homosexuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65(6), 1105-1118.

Herek, G.M. (1988) Heterosexuals' attitudes toward lesbians and gay men: correlates and gender differences. *The Journal of Sex Research*, 25(4), 451-477.

Likert, R. (1932) A technique for the measurement of attitudes.

Archives of Psychology, 140, 1-55.

Morin, S.F. & Garfinkle, E.M. (1978) Male homophobia. *Journal of Social Issues*, 34(1), 29-47.

Streitmatter, R. (1995) Creating a venue for the "Love that dare not speak its name": Origins of the gay and lesbian press. *Journalism Quarterly*, 72(2), 436-447.

末永俊郎(編) 1987 社会心理学研究入門 東京大学出版会

鈴木 淳子(1994)脱男性役割態度スケール(SARLM)の作成. *心理学研究*, 64(6), 451-459.

鈴木 淳子(1994)平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成. *心理学研究*, 65(1), 34-41.

付録. 調査表の構成

☆質問項目

- | ・好意的項目 | ・非好意的項目 |
|----------------------|-------------------------|
| 問1 同性愛者は文化的だ | 問2 同性愛者は理解できない |
| 問3 同性愛者は性格がおだやかだ | 問5 同性愛者は病気の温床である |
| 問4 同性愛者は知性がある | 問6 同性愛者が親戚にいてほしくない |
| 問7 同性愛者は優雅だ | 問8 同性愛者は変態だ |
| 問10 同性愛者と一緒に仕事がしたい | 問9 同性愛者は嫉妬深い |
| 問12 同性愛者は美的センスに優れている | 問11 同性愛者はモラルに反する |
| 問13 同性愛者は親しみやすい | 問15 同性愛者は排他的だ |
| 問14 社会は同性愛者に冷たすぎる | 問16 同性愛者は見苦しい |
| 問17 同性愛者は感受性が豊かだ | 問18 同性愛者には近寄りにくい |
| 問21 同性愛者は純粋だ | 問19 同性愛者は仕事ができない |
| 問23 同性愛者は人生を楽しんでいる | 問20 同性愛者は自然でない |
| 問25 同性愛者と友達になりたい | 問22 同性愛者は低俗だ |
| 問26 同性愛者は進歩的だ | 問24 同性愛者は肉体的な結びつきをより求める |

☆フェイスシート

性別, 学部, 年齢

出身高校 (男子校, 女子校, 共学, 別学の4択)

所属サークル (自由記述)

海外滞在経験の有無

いままでに同性愛を扱ったテレビドラマ・映画・ビデオを見た回数 (0回, 1~3回, 4回以上, の3択)

いままでに同性愛を扱った小説・マンガ・雑誌を見た回数 (0回, 1~3回, 4回以上, の3択)

同性愛，同性愛者についてのニュース・ドキュメンタリーを見た経験の有無
新聞を読む時間（分で記入）

好きなテレビ番組のジャンル（7項目の選択式・複数回答可）

付記：本研究を進めるにあたり，調査表の作成，調査の実施及びデータの解析は，山下玲子，源氏田 憲一及び一橋大学社会学部村田ゼミナールの学部学生2名の共同により行った。なお，本稿の構成及び執筆は，山下 玲子が行った。